

妊娠中の母親のビタミンD摂取と生まれた子のう蝕との関連

【背景】

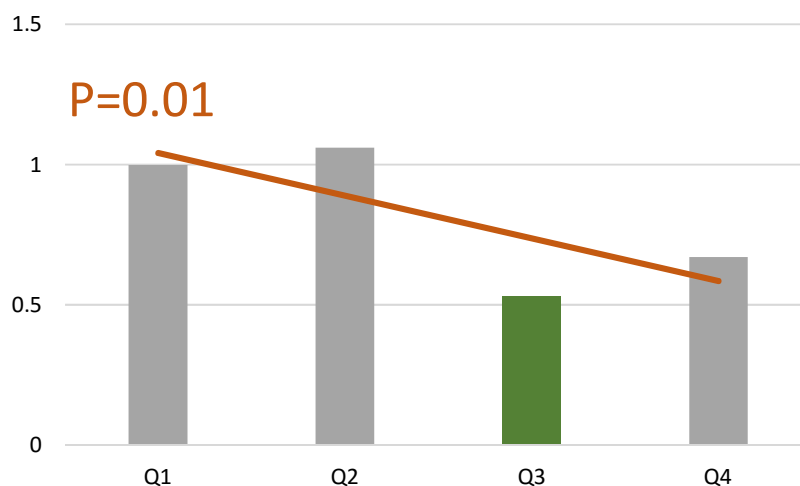
母親の妊娠中の栄養摂取状況等、胎内環境は子の歯牙の発生や形成、石灰化に影響を与えているかもしれません。今回、九州・沖縄母子保健研究の3歳時追跡調査までのデータを活用して、母親の妊娠中のビタミンD摂取と、生まれた子の3歳時のう蝕との関連について解析しました。

【方法】

九州・沖縄母子保健研究の3歳時までの全ての調査に参加いただき、今回の解析に使用する変数に欠損のない1210組の母子を対象としました。妊娠中の母親のビタミンD摂取は、妥当性の検証された食事歴法質問調査票を用いて情報を収集しました。う蝕のデータは3歳児健診の結果を質問調査票に転記頂くことで得ました。母親のビタミンDの摂取は、4分位して解析しました。

【結果】

妊娠中の母親のビタミンD摂取が最も少ない群(Q1)を基準にすると、2番目に少ない群(Q2)、3番目に少ない群(Q3)、最も多い群(Q4)の補正オッズ比はそれぞれ、1.06、0.53、0.67でした。Q3では、有意な負の関連を認めました。さらに、傾向性P値も0.01と有意な負の量-反応関係を認めました。



【結論】

母親の妊娠中のビタミンD摂取は、生まれた子のう蝕に予防的なものかもしれません。

【出典】

Tanaka K, Hitsumoto S, Miyake Y, Okubo H, Sasaki S, Miyatake N, Arakawa M. Higher vitamin D intake during pregnancy is associated with reduced risk of dental caries in young Japanese children. *Ann Epidemiol.* 2015; 25: 620-5.